山城名所記　五

ル 呂 4
1.606
5

洛陽名所集巻之五目録

泉涌寺　新熊野　清閑寺　東福寺
萬壽寺　稲荷　藤杜　深草
墨染寺　宝塔寺　醍醐　笠取山
山科　安祥寺　花山　御廟野
粟田山　青蓮院　伏見　御香宮
木幡　小栗栖　櫃川の橋

泉涌寺

○泉涌寺

此寺ハ東福寺のうしろの山ぎはにや
斉衡三年に。左大臣緒嗣公建営や。はじめ
法輪上人名づけゝのちに。仙遊といひけるため。俊芿
あらし泉涌とかけるを。建保六年宇都刺史
従五位下信房俊芿にゆづりてんぺい。廃頽し
かゝる後。後鳥羽帝に奏し。再造をとげ官寺
となしつるとぞ。それよりのち代々帝
王の陵所となりければ。これを清僧
おもふべし

俊芿字ハ不可棄肥後乃飽田郡の人也。七歳に
て佛法にいりそんじ九歳にして州の味
木郡の吏湯憑養子となしなつきく自然と
りふ。十歳のとく妙法華経をよむこと六日にしてとげ。
十四の時飯田乃真俊にしたがひ。顕密の教を
まなべり。十八のとく落髪し。十九のとく大宰府
乃観世音寺にゆきて具戒をうけ。建久九年
に渡宋をこゝろざし。百日乃眠をさら
挂錫十ゐの十年四月に。商舶にのりて浮海
し。五月のはじめ。江陰軍にいたる。径山の
がうと蒙庵聡禅師にまみえん昭とを景福る

如庵了宏律師にしたがうて律部をならひ。持犯
開遮をもしことげり。建暦元年のとし帰朝
せり。宋地にあること十三年也。そのゝち
はふへことごとくもれるしたがへし儒佛の
書凡二千百三巻。経論数千種をもたらすとぞ。
貞應三年十月に。肥州の刺史平家連をそて
摂州にいたりし時。武州の刺史平泰時を
まねく。菩薩戒を受ぬ。嘉禄元年十月泉涌寺
にをもく。灌頂講堂にて台密律二一宗
にしも泉涌寺にして中興せり。後鳥羽帝
并陽宮のくく。菩薩戒をうけ給ひてのち。隠遁

帝また菩薩戒をうけたまへりはじめ肥列
の官吏秦氏もとめて。十九のとし病臥より
むなしく。醫巫もかひなくてつゐにむなしくなりぬ。附
はや溘死に及びけり。父母なげくことかぎりなし。
さりしど扨の亡骸をとぶらひけるところ。辞して
開まかりがたしとて蜜経を誦しいのりたまひしかば。
蘇息しけり。宋地のくにへのごとくいきかへれり。異
妙なりき。初め扨。女郎筒嶽に棲遅し。伽藍
なく。正法寺ととなへしが。那羅衛の内
木像を鋳うつし。扨を安置せらるゝとは
いふなし。安貞元年十二月八日に寂せらる。

其の六十二とて

新熊野

○此所は泉涌寺の北也。紀州熊野の三所權現を移まつりし地也。十一面觀音。弘法大師の作仏。今洛陽三十三所の觀音のその一なり。

清閑寺

○此寺は新くま野の辺。佐伯公行建立せらる舎院のみぞのこる。又小督局ふかく隠すこしと云。鐘へめぐりおりつるしや。世に清閑寺ととなへし也。

東福寺（とうふくじ）

東福寺　恵日山

○此寺ハ大佛より八町南也。開山聖一國師なりと
て　紗雲閣　選佛場　潮音堂　栴檀林
思遠池　成就宮　通天橋　千松林
耳露井　洗玉澗　是なり
釈辨圓。字ハ圓尓。姓ハ平氏。駿州藁科の人なり。
母ハ夢を受て孕ぬ。乃ち生る。十五の年。止観の
講席にまじはる。故に四諦外別立法性と云句に
て講師滞礙を問ふ。尓に解釈をきゝ十六にして
三大部をよみ。十八の年。園城寺にて落髪し。
野州の長楽寺にも栄朝にしたがひて傳

其道ひとひらきぬ。初め釋圓榮朝に、密印を
うけ。相州其壽福寺にて行勇に礼しぐこ
んといふ。流徒子首楞厳乃雜同と加へ、ぞれ藏
易ばせひ。宋地にわたらんことをねがひしくて。嘉
禎元年に。明州の界にたどりつき、徑山
に寓し。天童山癡絶沖に礼し。天竺寺の月
栖庭に台宗相承の図をさづけられ。首楞厳。
楞伽。圓覺。金剛。四經其疏鈔をとりけるに。
浄慈の笑翁妙堪。霊隠の石田法薫に法要をとひ。寧
退耕に逢。無準範の明窓なる所をとひ。徑山に
のぼりてまみえしに。佛鑑そのままに其器を許
し。旨をわすれしにして。會中乃大衆龍象にて
なのりける。淳祐元年四月に。猶。密庵師祖の法
衣并に自賛の頂相をさづけられぬ。同年五月
四明を發し。その秋に博多につき。崇福承天
乃両寺にあるまじり。東福寺の門子。湛慧大和尚
國藤原道家。かくそれ。相國のもとにて
ふかく京師にむかへ。光明峰寺乃別室にて禅
教秘密の灌頂をうけさせらる。正嘉元
年後嵯峨帝。禅門の菩薩戒をうけ給ひ。
黄金衣鉢とおくりたまひ賜はりて。建治
元年。亀山帝。師を宮中にめし、三教の微旨

ほこしけるに、かの年。深草帝。菩薩戒うけ
たまはんため。又堀河海太師之教乃大旨を問
けれバ。之教要略しるせるを述呈しけるを
しめされて。ふかく感じおぼしめし
色ぞありけるにおもしろきさて大相国大伽藍
を城東にたてらるに。洪基を東大にならひ。盛業を
於興福にならひて。東福寺となづけられ
給ふ。新大仏ぞふかくたてて。いまだ成就せざる
さるに。寒を作くして。禅彩をもて綵
洪営けん。なかば成るとおそからざりけれバ。大善
門寺ばかりかくのごとくおいしめ。建長七年に

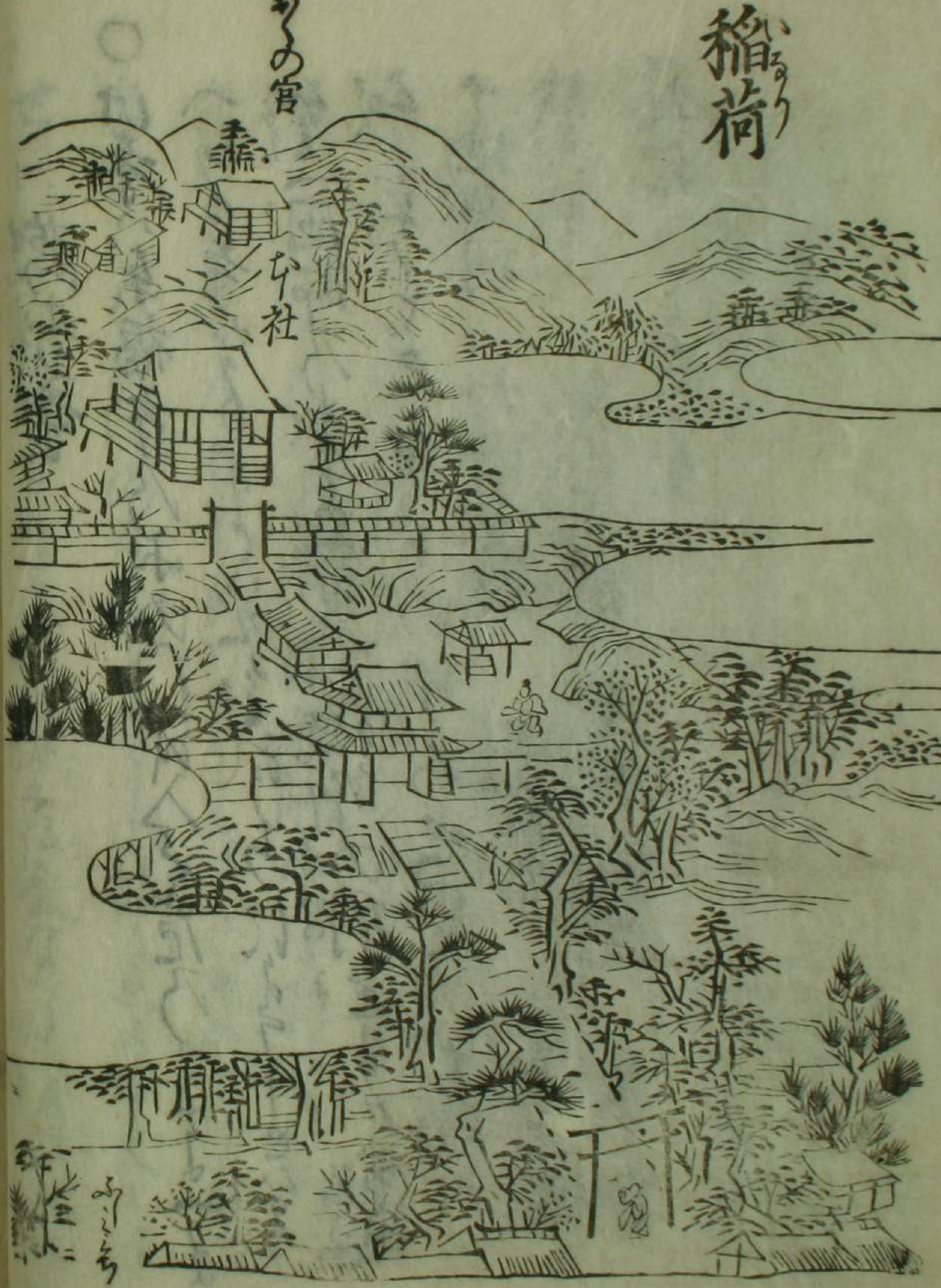
東福開堂し給ふまめ。正嘉元年に。平副師に
をもて相勿よまかせる。皇子征夷大将軍に向ひして
法の建化を領じ。そのうち。徳化のおほせうる事
とくにかぎらぬ。弘安三年の春。微疾にかかり。
常楽庵にうつりて。十月朔日。法鼓を鳴らし
衆を屋に集めいひ給ひて。御後十五日に至
まで。法堂。宝葉王座のもとにかへりて。重複せる
句を説。涅槃に入りたまひける。つゐに十四日の
晩かたにいたりて、ひきのけ給ひて。後頭遂におさん
居りけるに。十六日よりすでに。侍僧にかくしてし宝字
灑掃せよ。晩すでにおこらんとやまる

して越後乃無傳まうされぬ。尓。桐見んとようろつく
おもむきてに逝しぬ。遺偈曰。利生方便七十九年
欲知端的仏祖不傳正和のとしめ諡を国師
とたまふ。元亨釈書に委書せり
世にしられたる元亨釈書三十巻済北集廿
巻聚分韻などハ此寺乃うち海蔵院の僧虎関
乃作なり。虎関釈書ハ撰ひたてまつり表をそえ元
亨二年八月十六日に後醍醐帝にたてまつる。
宏学慧才乃ほまれありしかばそのゝち貞治
年中に大蔵経の印板とりて此様よりて今に
世に行はるゝなり。此文也。法堂仏殿なりしを虎関再営

萬寿寺

○此寺ハ東福寺乃北の門に入くだりて一ま
へんの寺なりけりといふハ元を起ちにゆりしとなり
聖一国師乃弟子宝覚禅師の開基にて京城
五山と号して之山乃そのひろせ此地の境ハ
十地超閣　大雄宝殿　三山神廟
枯木田春　新花更雨　東軒　南院　千松密径
境沼　琴亭
ここまでなり

稲荷



稲荷

○此社ハ。東福寺より八町南也
和銅年中にはじめていなり山に
あらはれ給ふをはじめとせ
或説に。空海。東寺の門外にて。稲をになへる
翁ありしに行逢ひて其のまゝ東寺の鎮守とし
たまふぞ。いねをになへるゆゑによりて。稲荷。
号をもとゝさせける
李部王記に。延長年中に。稲荷の神前にて貞崇
法師に告ありしは。大般若を読誦せば。災
難なし。瀧まんとなるべき

上中下の三社　一 上社 客人 十禅師　中社 大宮 四大神
下社 大宮 命婦 田中　延喜八年にはじめて建立
ありしとや
稲荷の明神乃御哥に。我たのむ人の願ひを
てらしもてらく来世におなじけの灯
親王の宮ころは ゆゑなく人におもしろきげ
なかやどりの事ことのはべいなりけるとをす
て知りまる。法師乃夢に社の内よりいかに
いぶしかる人かねのに永なる世まで
おなしとおもふうなれにすぐんすもれ
やどりはなしとおもひかるとや

藤杜

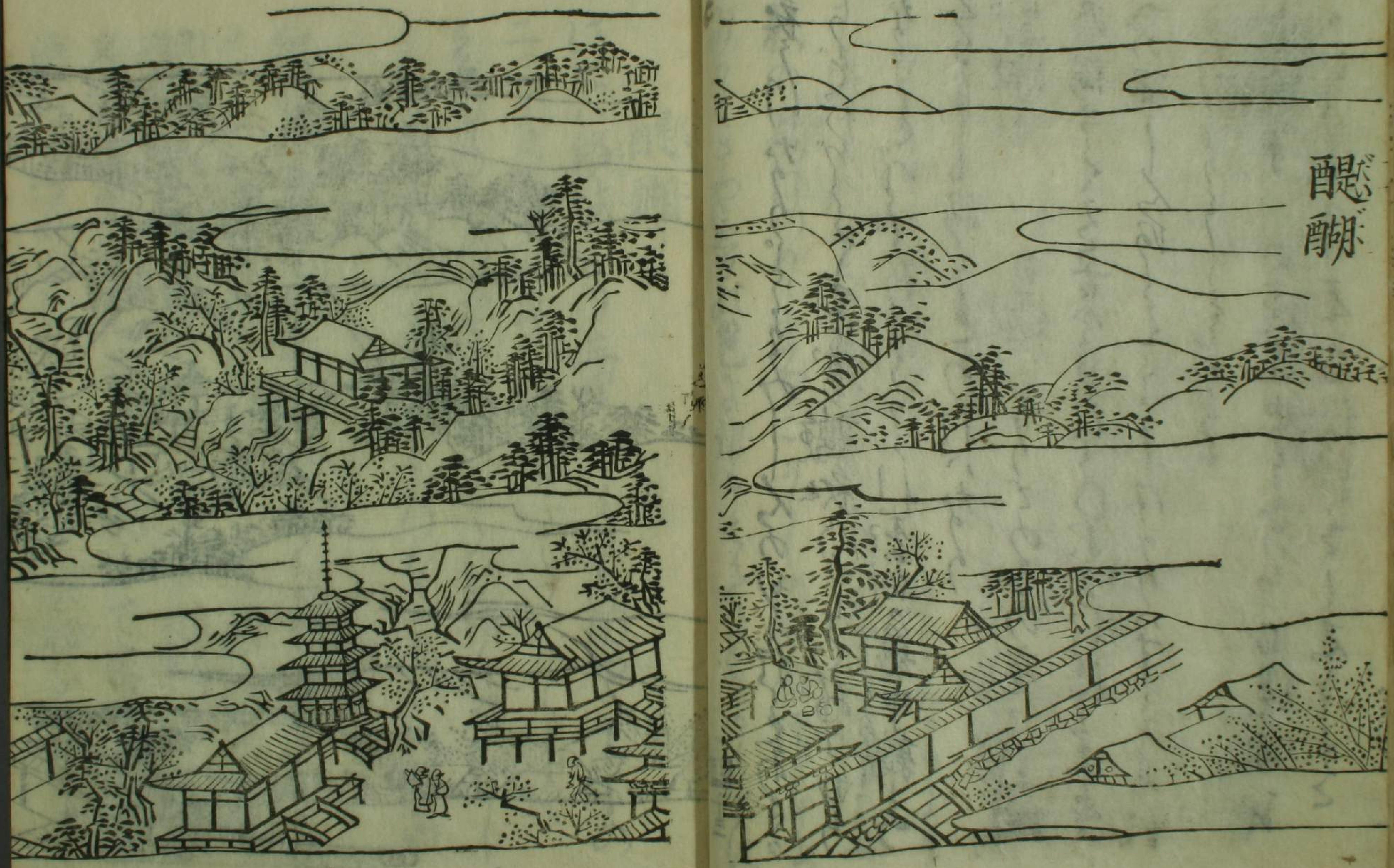
○此森は。深草乃西。淡陽の里。舞や。崇道
盡敬天皇の御廟とぞ
元正天皇養老四年四月。一品舎人親王勅をうけ
けるなり。日本紀三十巻系図一巻をえらみて
まゐらせられけるとぞ ○天平宝字三年六月舎人
親王を追尊し崇道盡敬皇帝と称し
當麻夫人を大夫人と称しけるとや 廢帝
ハ親王の子。當麻夫人ハ
親王の妃なり

○深草（ふかくさ）

此所ハ京より二里ばかりたつみなり
仁明天皇嘉祥三年三月廿一日に崩し給ひ同廿
五日此所に葬り奉るゆゑにふかくさの帝と申奉る。深
草天王と号し奉る此時文屋康秀が歌にくさふ
かき霞乃谷にかげかくし照日の暮しけふにやハ
あらぬとよめり。古今集に見えたり。定家卿の歌に。
うづらなく夕の空を名残にて野となりにけり
里の深草乃里。家隆卿の歌に思ひ入身ハ深草の
秋の露たのめし末やこがらしの風。雅経卿の歌に。
ふかくさや霧の色にかくれゆくうづらなく里に
衣うけなりとよみしんのかくれもあさく
らどおもかげく子夏の鶉衣乃うらくなからら
なりぬるいりぬおもかり。李白ハ籠中鶉より
くるしけれバなり

○墨染寺　日蓮宗なり。そのかみの庭に墨染
乃桜あり。古今集に○深草の野
への桜し心あらバことしばかりハすみぞめに
さけとよみしもここなり

○宝塔寺　日蓮宗也もとハ日蓮衣
のけられし本尊縁起ありしんところ


醍醐

醍醐

○此所ハ洛城より三里ばかり南や。上下の二山あり。其間五十町ばかりありとぞ。まものにて遊覧のひとひきりぬむすなり。賞翫ふかく人乃なのあおばの露

釈聖寶ハ。光仁帝の後よりく。讃州乃人なり。十六歳のとき。真雅法師よりて。得度し。三論を元興寺願曉に。圓宗唯識を東大寺平仁に。華嚴を東大寺玄栄に学び。又金剛峯寺の真然に謁して密教をならひ。源仁よりうけてまた奥秘をきはめたつも。

其のち興福寺の維摩講よ請ぜしめらる。
賢聖義二諦比量義をたゞしく論ぜし
め東大寺の東坊に怪鬼の出とりあるとて衆
これをはらはしむるに。宝うけとらし
坊に坊鬼のうちなをゆくりしてあらそはず。
けんたするとしゆんへんそん。陀羅尼ようり
志のゝちいよいよしおわざなすりける。一
又宝とさもし火かけおよかる時に。梁棟
より大蛇くだりておそろしき茶盞より影見へて
物ひとしかば。宝あやしくいのりけるに
し又庭上に一の巌石を宝金峯山
より負来しぞ。此のくに人力のおよばざ
く及ぶ事にはあらじとや。宝をしとゝめ
修練をこのゝ奥山にてあらはしぬ。
金峯山ありけるしるをとも葛城なとにては
行ありしをみゝとらさく。いましにも存に
侍りしに。貞観のころ聖宝。醍醐寺を開
顕密乃二教をのべ南京乃東南院をたて
三論法相宗をとらへ。一丈六尺の大像二千餘
体く衆。悲済かくつくりあらく。衛護経に金
峯山ありをしき。後吉野山台野河よ猿けらく。
ものめをたまかけおくゆのめさま。仁和三年勅よ

て。傳法阿闍梨をうけたまはり。寛平二年に貞
観寺乃座主にそなはり。延喜のはじめつかたは
僧となりけれ。のちには。僧正とすゝみ。同九年に
醍醐をたてまつり。観賢寺となし。同年に根
普明寺にゐて。病よみかへし給ひけるに。太上皇
幸向し給ひて。同七年七月に逝しぬ。
年七十八とぞ。又宝。所持の如意あつまりけるは
五師子のさきさゝ。両に三鈷杵をとり。顕密
ともにきはむべきしるしを表しけるや。宝没し
て代々うけ伝授し東大寺の東南院はれ
されしが。興福寺維摩講師つとめしゐの如意
なり。濫觴に。雄弁ともぞ。ゆゝしきなる。論
るのおりは。東大寺のうちの也えをつぎさだ
して。講会をとりおこなひやそのよし。
朝廷。東大寺に宣じて。如意をたまはらしめ。
もり伝へ給ふ也。識に。秘重のわざや
釈延殷。姓は。橘氏但州乃人なり。十六のとし。
台嶺にのぼり。慈仁より受戒し。静照に
したがひ。山家の法を学び。長保二年に。
寂照とともに。入唐しける故。朝より殿を
はゞかり。それぞの偉業をおもしろ給ひて。後又
景雲乃みなもとにて。皇慶をたづねて両部の

密法をうけ。寛仁乃ころ多武峯にこもれ。
りしを志ばらくして學をこさりみんのうしとて居だ
まうみ明快法師とともに。後に本山に
かへる。又大原山より入覚尋ゆく房をひら
きしをとめるも。中納言顕基。殿よりてさる塚
をたらし。源氏ゆゑや櫻岳嚴院に草堂
ゆりきぬ。長曆二年春。慈覚智證の両流
座主位をそのとおしとを。殿ふのくにとい
て。醍醐寺にはしまりにけるや

笠取山

○此山ハ醍醐のおくにちかき也
匡房卿のうたにも。かくれぬ笠取山乃しぐれにハ
ハ秋ぞめでたき人やおもひかへさで。元方雨ふる
露もかくし。我は笠取乃山をいかでくぐる紅葉
めけん。又為頼朝臣のうたにも。あめふるに
山ぞ白妙の花をもちてさいばらくなるらんと
ようしかくもきる

山科

○此所ハ都より東南
後拾遺に。和泉式部のたにこ。ゆるさ…ちん

みよかくれがとこじまくまで山科の里
又藤原隆信朝臣。春の比山科わたりをとほり
けるに。梅花ばかりなる宿のみえければ
誰が家ぞ問せ給ふに。もしたるくひまきは
ひと也世一條きけるこのよ　梅が香ハ立べ
かりける所を風のつかひにぞ知らや雨ぬ
しらぬよめまこそきまらバらずなるま　匂ひもぞかる
りゐれ程ど梅がくにほひてつきてし
いつぞいもしかくよそにもれし侍りとて
天智天皇のおほんせられしとや。後山階と
醍醐天皇。醍醐寺の曼陀羅堂の良あるゝ

安祥寺

○此寺ハ山科の東ぞいにはべるとぞ。本尊ハ觀音や
釈慧運ハ東寺實慧の門弟にて眞言に名
あり。圓仁と倶に。渡唐し十四年にてかへり。安
祥寺にて貞觀十二年九月に往
生しけり。年七十四とぞ
讃岐守藤原公輔はじめ瀧覺といふ慈覺乃
門弟にして。後に俗にかへりて世にある大臣とえ
けり。此時に都のうち怪ともおほかりけ
れば大史よ勅し。卜はしめて。東南の方に
佛像を浄めなしゆへなるよしを奏し

ありし公輔に詔ありて此安祥寺の諸堂を整
理せしむ。公輔寺に入て見るに。白杖かく居
像を作りし工のなしけるさまぞあはれなれば
おもひしにかはりてありがたきさまにおぼえけん
文徳帝の女御崇子は世にかくれて後の御
葬はこの寺の晦日よしなりて。人くさ
はげ物。年の数によそほひて堂れおまた
見ば。山を作りにうてがはくて是あやうに見えて
なお紫業平朝臣 山の名かはりてくもぐ
にあらはれたるのちまたと同しきべし

○

花山

○此山は花のころ人や里を
僧正遍昭立のまゝ夕ぐれ花の色に心とゞみる
なほ山のいは路は越じとて宿をかりてしばしく
とゞまりし人の花山にまかせて夕
さりは行ゆく人をしたふなる時ぞ
又津守国基。花山に詣てよめり
僧正遍昭が墓の桜ちるを見て
てゝりしに花をしらぬに桜花を
昔たれまちつゝひしくきくやよしも
鳴やなけ山郭公といひ。定家卿は雪の

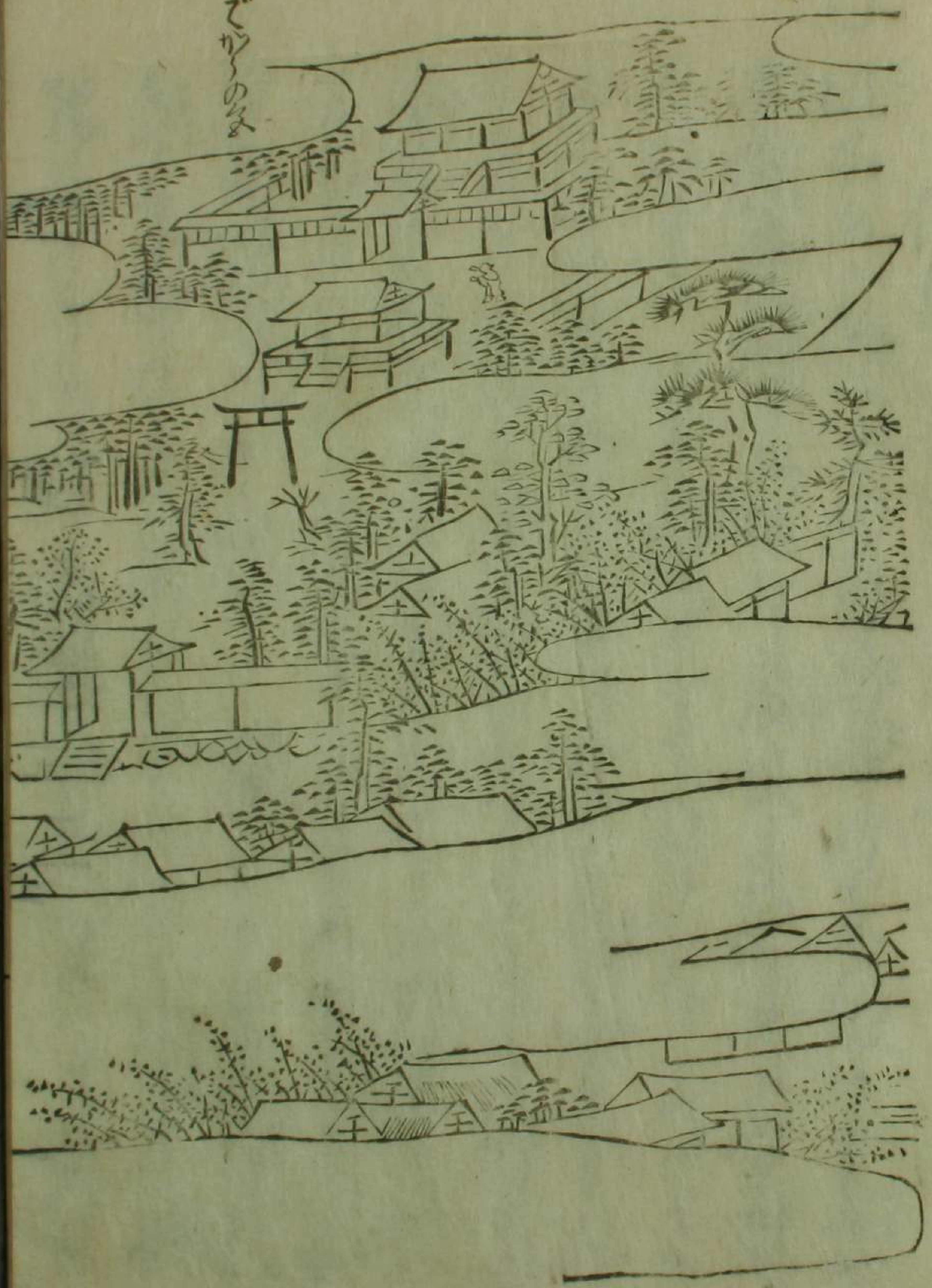
多く寺々もとし。就中末ぢ。おきなの
めしと移しゆし

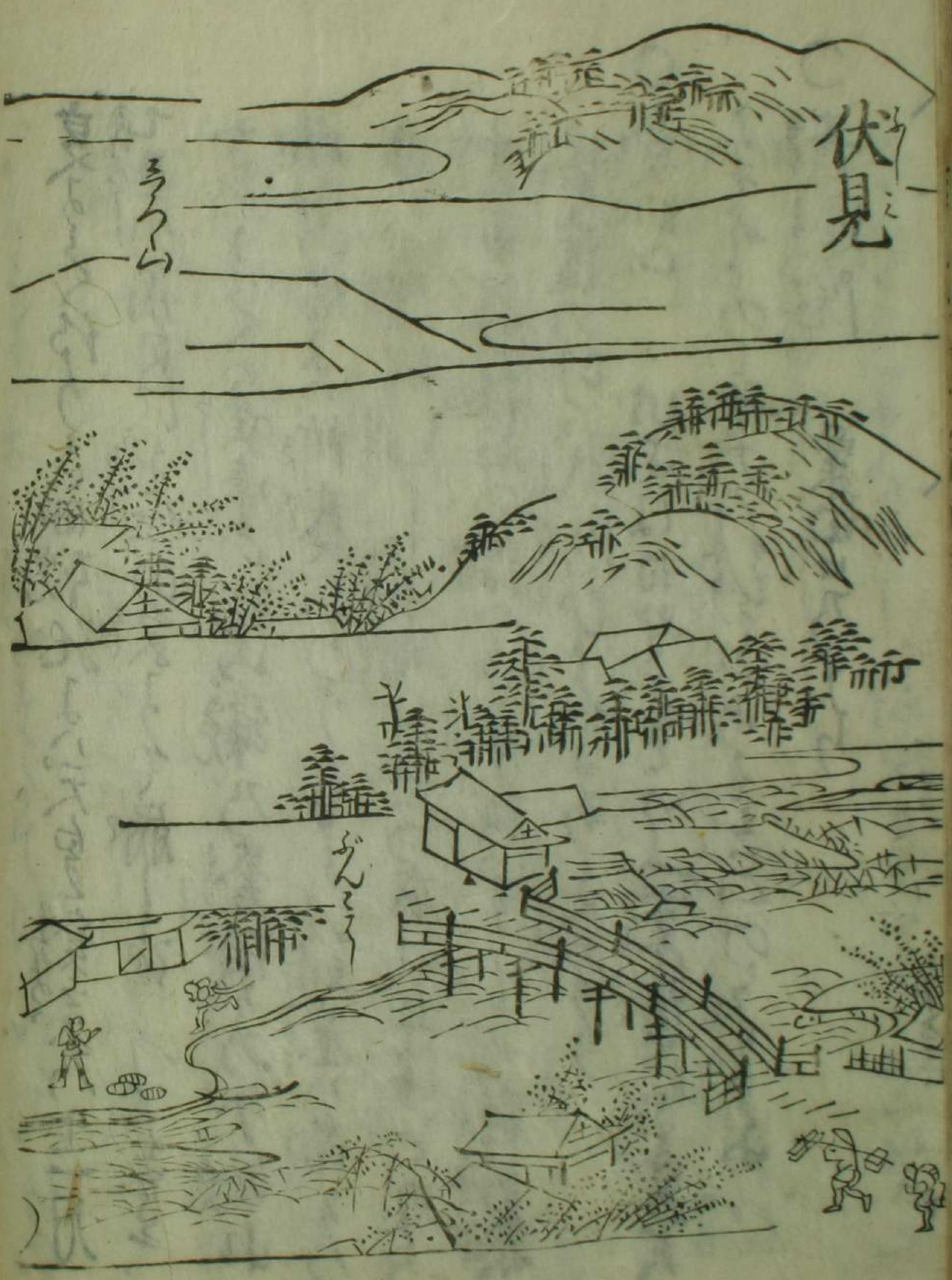
○御廟野　此所ハ山科の内にて天智天皇御陵の跡
御廟ありしハ野中にありし所ハ往来の人のかたはらに
うかゝり難所なり。遥かに待りぬ。跡乃里よりくだ
のこりたるまゝハむかしハ人車のかよひぢハおそ
あれたりしとて。其のち山よりつきあがりぬ世にいふ
陵の第一なり。昔年。此帝崩御ありしに山科の
里より出るくつにて行かへり跡ハさだかならず
崩所ハいづくとも知る人なし。たゞ御陵のあらそひ
まかりしに陵とさてさてけりとかきける

定まりけるにや。日本紀ニハ天皇辛未乃十二月
乙丑の朔日にて近江の宮にて崩じ給ふとあり
支那にてハ黄帝の橋山。舜乃蒼梧の外に葬れ
始皇の廟にハ祈賽たえずとのみつたへし劉基ハ禹王乃
廟にハ七律を賦せし。張鵬ハ文王の廟に五律をのこす。
皇甫湜の根石の銘ハ今まで伝へ侍りしめ。韓昌黎
が豊陵の銘ハ残缺してひとへにあらハなり

○粟田山　此所は日野岡といへり古今集にもよみ侍
よそめにのこせのしるしのこのもとにのこりしふ

○青蓮院　粟田口乃うち




伏見

伏見

○けふは深草の南鳥羽乃東。桃山より麓や
平秀吉関白出所に廣城をかまへられて
そのゝちはいとはなはだしくさかへ
侍りしかどもやさしきバかりを家居をなせども
とのゝ乃こゝろもとくやうかりをしのびよ
鱼志ぬことおそ、いのちまでも。蘚草をしげ
こぬるもまたなるもぞふれなれなどもさかり
ばなかやかの渡ハいろう松のしかもりうやさしく作るに。
ちやうどむかし乃をる國へのよふなる。そのさき横
ひろしくうちはなびらのもよろしきのこゝろ目

然まけだりるまゆるくぞ云ゐさきをよなよかく。
あらそひ急よせのひ棹(さを)さすま艀(おぼつ)げの唐土
つむのしかくごとぎまうり花のすりとむねみ
そのすぐ又てる紅乃きてめたるとぞんも
秋あわりのもをさして。猿(まえ)ゑの袂(たもと)をぬらして。
なすざさゐなるけるくみるの夢又ちのもわび
しぼ蓬(とま)のうち。夢もなりのくむすぶよ
くれまさバ枕(まくら)さへしるまてぬるぞ
一夜のなやとうるまあかし。大坂(ざか)といふ所
まはゆぐ。ゆひくにけりあしかふれて

世にし伏見翁(ふしみのおきな)とく。こまゆる。たゝまで
ざれものまゝ常に。大和國(やまとのくに)菅原(すがはら)のかきうら
住る岡(をか)ゐおをまうまやちなり。その所を伏見里
とぞいひて。今に和列(わきう)さなま。菅原やふしのまん
里乃藻枕(さゝまくらゆめ)夢も。いく東わ人めくらん
よろし和列や。伏見の宮すみてもかやすみ
そうらん

御香宮(ごかうのみや)

○此宮ハ。神功皇后(じんぐうくわうごう)の廟(べう)なり。この所社金のれ
弥る

木幡

○此所ハ伏見乃東。宇治ちかき所なり
萬葉集に。柿本人丸の哥に。山城のこはた
の里にうまハあれどかちよりぞくる君をおもへバ
つるぞりとよめり

小栗栖

○此所ハ伏見の東なり。醍醐の西にあたれり
とも云傳りき
釈常曉ハ山州小栗栖なる路ちかき葉をほこりにや。
ひろく元興寺の豊安まなびて兼和尚に学
渡唐し。淮南の廣陵館にいたりて。栖霊寺
の文璨をつきて灌頂をうけ。又花林寺の三教
講論元照といふ人に謁してよく密奥をき
わめ。阿闍梨位にして。大元師の秘法を
まなびて傳へきたりく。申言し傳りく
加國小栗栖の法琳寺にて元師の法を
修せしむ。又并斷乃為。天下大に旱
魃しける時ハ。常暁おりしく。神泉苑におひく
その大元の法修し白龍幡れ上にのぼりき
そのまゝに。甘雨しきりにふりき。貞観七年十
一月晦日に。逝去しにき

昔時兼好法師。その家へ来たりしに。さるかた
んはなきまゝに。絶えしたる柴の戸にても
はなれまじけるよしにて。あるじにめぐらされ
庭のかたの柑子の木まできびしくかこひける
様みて。此木なからましかばと思ひしと云ひ。鐵
にさらさらになれぬにて世のつねの人の庭
のやうに。牡丹芍薬ようやく花をかぞへさるほど
しにけりといへるものや。兼好かやうにつゝまれ
余はまたかくのへうつりてあれども世
らぬ。ぬるのへあまりて。西行が心しぞ徳
大宰大臣の宸殿よいひけれど縄も張小
寝殿の御いたはりにや。なかなかそれは
いづくのしくて。彼の方と同じく必しも
人くれさらにて。宴さんもかくまして
なべてのうれしのうれてくしれたまへば
をみて見ゆるなり

櫃河橋

○此所はふしみへの道とも
後藤といふ所やて出て伏見へ行の道のうへ
まつりもとりいつかのれなし